

親鸞のいう「自力」とは

はじめに

親鸞が明かす「他力本願」という言葉。一般的には「他者（他人・神観念等）の力」をあてにし、それを頼りとして「自らの願望」を満足させること」等との意味でよく用いられているようである。例えば、新聞紙上等では「他力本願から抜けだそう」「合格祈願は、そもそもが他力本願の行動」「他力本願で金持ちになる人」などの言葉が躍る。「祈願・神だのみ・他者の力（お金）をあてにする、頼りにする」¹「他力本願」との了解が一般的なようである。もし文字面だけで「自力」を「自分の力（行為、身口意の三業）・主体的努力」と単純に了解してしまうのならば、自ずと「他力」は「他者の力」と理解されるであろう。つまり「他者」なる「阿弥陀様あるいは神様・神観念等」の「善根功德・御利益パワー」に頼りすぎることが「他力本願」であると。けれども、親鸞の「他力・本願」とは、そのような「他者の力」によって「自

渡 邊 了 生

らの願いや目的・欲望」をかなえることをいうのであろうか？ もし、そうであるならば「他力」の教えとは、さらに「自分の力（行為、三業）・主体的努力、それに連なる社会性・社会的行為性」の否定をいうのであろうか？ 現代社会一般だけでなく「浄土真宗」内でも、例えば「信心とは機の無作すなわち、自分では何もやらないこと」で、まったく名号のひとりばたらきで救われるものであること⁽¹⁾との理解もある。

いまいう問題は「他力」というよりも、むしろ親鸞のいう「自力」概念への誤解に基づいているのではないだろうか。そこで、本稿では、「自力」を「他力」との「相互否定・対立関係」として見なしていく親鸞独自の「自力」観を探ってみたい。これによって、その相互否定関係にある「他力」の意趣もまた、おのずと明らかなものとなろう。すなわち、親鸞浄土教における特徴ある「自力」概念（＝「信罪福心」）の考察をもって、あらためて社会一般（および真宗教団内）にお

親鸞のいう「自力」とは（渡 邊）

二

いて「他力本願」Ⅱ「他者の力」によって「自らの願いや目的・欲望」をかなえること」Ⅱ「自分の力（行為）・主体的努力」の否定」と理解されやすい、その「誤解」を紐解く端緒としてみたい。

一 親鸞のいう「自力」概念の基底Ⅱ「信罪福心」

親鸞は「自力」概念を次のように明確に定義している。

定散の専心とは、罪福を信ずる心をもつて本願力を願求す、これを自力の専心と名づくるなり。

（『顕浄土真実教行証文類』「化巻」真門釈、三九九頁⁽²⁾）

親鸞は、この自釈を魏訳『大無量寿経』の文言（「この諸智において疑惑して信ぜず、しかるになほ罪福を信じて、善本を修習して、その国に生ぜんと願ぜん。このもろもろの衆生、かの宮殿に生ず」）に基づき示すと共に、その『大経』の文言を『教行証文類』「化巻」要門釈——自力諸行——（三七八頁）と真門釈——自力念仏——（四〇〇頁）との両方に引文する。つまり親鸞は、「自力」概念を、自身の「信罪福心」（「罪福」を信ずる心）、すなわち「善因善果、悪因悪果」という業報（輪廻）思想とその「果報」への執心「実体論的・運命論的な因果説に執した業報思想の束縛」であると規定する。このような親鸞の「自力」理解は、『正像末和讃』「誠疑讃」にも語られる。「誠疑讃」では「自力」の事態に準拠して語られるとこ

ろの「不了仏智のしるし・仏智不思議の疑惑・善本修習・疑心の善人・方便化身土にとまる・辺地往生・胎生・疑城胎宮」との概念すべてを、「信罪福心」の内に捉え明示している。

不了仏智のしるしには 如来の諸智を疑惑して 罪福信じ善本をたのめば辺地（方便化身土Ⅱ報身土中の化）にとまるなり

罪福ふかく信じつつ 善本修習するひとは 疑心の善人なるゆゑに 方便化土にとまるなり

如来の諸智を疑惑して 信ぜずならなほまた 罪福ふかく信ぜしめ 善本修習すぐれたり

仏智の不思議を疑惑して 罪福信じ善本を 修して浄土をねがふをば 胎生（方便化身土への往生）といふときたまふ

（以上、六一〇～六一三頁）

等と示し、「自力」という自身の「信罪福心」を基底とする「善本・徳本修習」の内にあらわとなる「うたがふつみ・とが」（六一三頁）をここに語っていく。

右のごとく親鸞は、「自力」概念の基底を自身の「信罪福心」（罪福を信ずる心）であると明示するのであるが、かかる理解は、真宗七高僧および法然門下の著述中にも見うけられない、親鸞思想における特徴ある「自力」の再解釈・再定義であるともいえよう。

二 「自力（諸善根）をたのむ」——「信罪福心」——という「異学・別解」の否定

「信罪福心」を「自力」の基底に据える親鸞の特色ある「自力」観は、『一念多念証文』（六八八頁）の「一念・多念」という念仏観に言及する文言の中にも端的にあらわれる。親鸞は、ここに「信罪福心」に執しながら「わが身をたのみ、わがころをたのみ、わが力をはげみ、わがさまざまの善根をたのみ」ことを総じて「自力」と規定する。したがって「善因善果・悪因悪果」という「実体的因果説・行為論・業報論」に基づく「別解のひとつ」の「念仏・助業」（自力念仏往生・諸行往生）と同様に、「異学（聖道・外道）のひとつ」の「余行・余仏を修し念ずること、吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむ」こと（＝祈願・神だのみ・お祓い）も、ともに「自力をたのむもの」——「信罪福心」をたのむもの——であると語るのである。すなわち、自身による「業報思想の束縛」に埋没し「自身が『福』なる業因を行えば必ず都合の良い『福（徳）』の果報（御利益）が、また『罪』なる業因を行えば必ず都合の悪い『罪（悪）』の果報（バチ）が導かれる」と執心する運命論、これにとらわれる自身の「執心」を「信罪福心」と呼び、これこそが「自力」であると親鸞は明かす。つまり、社会一般に「他力」として理解されているような「神だのみや

親鸞のいう「自力」とは（渡 邊）

迷信・祈願により御利益を求めること」、それ自体をも「自力」と見定めるのである。ゆえに親鸞は、ここに問われる「一念多念のあらそひ」についても、それは「信罪福心」を根拠とする念仏の功（業因）の多少とその果報（業果）に執する論争であるとして、「自力」（信罪福心）に基づく範疇の「一念・多念のあらそひ」それ自体を否定していく（六九四頁）。また、親鸞は、このような「自力」の執心による念仏往生（別解）について、これを「信罪福心」という「実体的業報思想」に執し「本願（如来）の嘉号をもつておのれが善根」（「化巻」四一二頁）として念仏の善本を修習し「みづから浄土に回向」（『三経往生文類』六三五頁）していくこと、すなわち「植諸徳本・真門」（ならびに「修諸功德・要門」六三一頁）による往生を「自力」であると定め、厳しく遮する⁽⁴⁾。そして、いまいう「化巻」箇所においては、かかる「信罪福心」に執し「本願（如来）の嘉号をもつておのれが善根とする」がゆえに「信を生ずることあたはず、仏智を了らず。かの因を建立せることを了知することあたはざる」と説示される。つまり親鸞は、「信を生ず」＝「信知」といわれる如来回向による「仏智の了知」こそが、同時に「信罪福心」（業報思想への束縛）に執する「自力」の「否定・超克（横超）」に他ならないことを顕示するのである。すなわち「本願の嘉号をもつておのれが善根とする」（＝「罪福を信ずる心をもつて本願力を願求す」と

親鸞のいう「自力」とは（渡邊）

四

の自身の執心によって、先引の「誠疑讃」にも示されていた「不了仏智」（＝自力）の事態が想起されることを語る。自身の「信罪福心」——「将来に功利主義的な見返りを期待する行為論への執心」「実体論的・運命論的な因果説に基いた業報思想への束縛」——なる「自力」により引き起こされる「不了仏智」という事象は、その自力の執心ゆえに、必然的に「業報（輪廻）思想の束縛」を超越せようとする「如来する⁽⁵⁾諸智・仏願（の生起本末）」——他力の道理・用——への疑惑（仏智疑惑）を生起させることとなるのである。いうならば、かかる「信罪福心」と語られる凡夫の「自力」の執心に基づく「業報論・運命論」への束縛と固執が崩壊、否定されることにより、初めて「悪人正機・悪人の往生成仏」（墮地獄の超克）の仏道が現成することとなるのであり、かかる「自力」否定への「信知」のプロセスこそが「他力」の用・道理となる⁽⁶⁾ことがわかる。

三 親鸞浄土教における「自力」と「他力」の相互否定的対立関係

自身の「信罪福心」を「自力」概念の基底に据える親鸞独自の理解は、「自力・他力」について、新たな「相互否定的対立関係」を導くこととなる。親鸞は、

横超とは、本願を憶念して自力の心を離る、これを横超他力と名

づくるなり。（中略）これすなはち真宗なり。（「化巻」三九五頁）等（『唯信鈔文意』六九九頁）と示し、「自力」の執心を「離れ、捨てて」いくこと、それ自体が「他力」であり、この事態を「如来大願の他力に帰する」（『愚禿鈔』五三九頁）と語るのである。

親鸞は、自身の「信罪福心」——実体的な業報思想・因果論——に執心し、阿弥陀仏および神観念とその〈他者〉の「力」（加被力およびマナ）を「実在有り」と固執・決定して、これらを自らの「善因善果」のための「善業・善根・善本・徳本」として積み重ねること、また同様に「罪業」を滅して「罪果」を避け、「善果・楽果」なる「業果・果報」の「福」を導こうとする言動・行為こそが「自力」であると主張するのである。つまり、親鸞は、これまでの浄土教の伝統的理解といえよう業報思想の範疇内における相互補完的な協調関係性〈自力＋他力〉という理解とは異なる、独自の「自力・他力」観の視座から、あらためて、これら両者の概念を、相互否定的な「他力」と「自力」（自身の「信罪福心」「実体的な業報思想・因果論への執心」）という対立関係として再定義していく。すなわち、親鸞においては、「善因善果、悪因悪果」という業報（輪廻）思想の束縛＝「信罪福心」の内に〈自力〉としての自身の「善業・善本」等の修習を積み、さらに〈他者の加被力〉をもって「おのれが善根」とし、さらなる自身の修

習を重ねていくというような〈自力+他力〉の相互補完的な協調関係をいうのではない。親鸞は、いまいち業報思想の範疇内における相互補完的な協調関係性〈自力+他力〉という理解そのものが、もはや「信罪福心」なる「自力」（堅超・堅出・横出および外道）であると語り、その「自力」の「完全否定」（横超）こそが「他力」（如来）する本願・誓願の用であると示すのである。親鸞が、『唯信鈔文意』（七〇七頁）にも語るように、かかる「自力（信罪福心）」の否定——「自力のこころをすつといふは、やうやうさまさまの大小の聖人・善悪の凡夫の、みづからが身をよしとおもふこころをすて、身をたのまず、あしきこころをかへりみず」——、すなわち「実体的業報思想・因果説」なる「戯論」の執われからの解放・超克こそが、「無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり」と説示される「凡夫入報」の「横超他力の道理」（不断煩惱得涅槃・煩惱即菩提・煩惱菩提体無二・生死即涅槃）であることを親鸞は主張しようとするのである。

四 親鸞のいう「自力」概念からみる「義なきを義とす」の解釈

従来いわれる〈他力〉Ⅱ「主体的行為性（三業）」という〈自力〉の否定」とする見解は、往々にして、親鸞が諸処に示す

親鸞のいう「自力」とは（渡 邊）

「他力には義なきを義とす」との説示内容に通じるものでありと理解されてきた。すなわち、一般社会にいう自らの「主体的努力・行為（三業）」をも「自力」Ⅱ「義」と見なし、これを一切うち捨て否定することが「義なきを義とす」の意であると。けれども、これまでの考察のように、「信罪福心」Ⅱ「実体的業報論・因果論への執心」を「自力」概念の基底と見るならば、「他力には義なきを義とす」との文言理解についても再検討されなければならないであろう。

親鸞は、「信罪福心」を基底とする「自力」を「わがはからひ・行者のはからひ」と示し「行者のはからひは自力なれば義といふなり」（『御消息』七四六頁）と、あるいは「義と申すことは、自力のひとはからいを申すなり」（『御消息』七七六頁）とも語る。つまり「義なきを義とす」は、「信罪福心」による業報思想へのとらわれⅡ自力の執心Ⅱ自力のひとはからいであるところの「義」、その「義」なき（否定・超克）を「義とす」——「他力」の道理・法則（六八五頁）の信知Ⅱ「難思議往生」（六二九頁）——と了解されるべきであろうと考える。ゆえに親鸞は『尊号真像銘文』（六七三頁）には「実体的業報輪廻思想」（「五惡趣」）への自力執心を「截る」ことを「即横超」と語り、この（横超）他力の道理・法則」を、また「義なきを義とす」と説示するのである。

結 論

近年、本願寺派教団内でも、「自力」¹¹「主体的行為性（三業）・主体的努力、それに連なる社会性・社会的行為性」の否定こそが「他力」であるとする声を聞く。けれども、これまでの考察から、親鸞浄土教において「自力」を単純に「自分の力（行為）・主体的努力」と文字面だけで了解し、故に「他力」の法門は「自分では何もやらないこと・主体的行為性（三業）の否定」等であると結論付けることには甚だ疑問が残る。⁶もし、このような結論のみを一般社会に教化していくのであれば、世俗にいう「他力本願」理解は「誤解」ではなく、かえって至極当然の帰結であろうともいえよう。

私たち真宗者は、自身の「信罪福心」を基底とした親鸞独自の「自力」概念をふまえた上で、「自力・他力」の教学的理解、および社会一般にいわれる「他力（本願）」の誤解の実状という問題を、今一度、新たに捉え直さなければならぬと考える。

- 1 桐溪順忍『講座真宗の安心論題』（教育新潮社、一九八三）二八頁。
- 2 引用文の頁数は、すべて『浄土真宗聖典（註釈版）』（本願寺出版社、一九八八）による。
- 3 梯實圓『顕浄土方便化身土文類講讃』（永田文昌堂、二〇一〇）

三八頁、同『教行信証の宗教構造』（法蔵館、二〇〇一）五六頁、紅棟英顕「親鸞における念仏の真仮について」（『印度学仏教学研究』五八一、二〇〇九）を参照。

4 なお、親鸞は「信罪福心」¹²「自力」との解釈を前提に、「善本徳本」を自身の業報的な「実有」なる「善業」としてではなく、「善本¹³如来の嘉名・徳本¹⁴如来の徳号」という「如来の用」（他力）として再解釈し、その内実を「至徳成満し衆禍みな転ず」（三九九頁）と明示する。

5 「弥陀如来は如より来生して、報・応・化、種々の身を示し現じたまふなり。」（『証卷』三〇七頁）

6 本願寺派の本来の伝統宗学においては、「信後の報恩行」としての「主体的行為性（三業）」や社会生活への「実践」が明確に主張されている。詳細は普賢大円『真宗教学の諸問題』（百華苑、一九六四）、同『真宗教学の発達』（永田文昌堂、一九六三）を参照。

〈キーワード〉 親鸞、自力、信罪福心、業報、他力本願

（武蔵野大学仏教文化研究所研究員）